

紹介

大橋崇行著

『落語と小説の近代 文学で「人情」を描く』

芦川 貴之

本書は、小説の実作を手掛けながらも明治文学研究の最前線を走られている本学准教授大橋崇行氏による二冊目の研究書である。前著『言語と思想の言説 近代文学成立期における山田美妙とその周辺』（二〇一七年一〇月、笠間書院）と異なるのは、落語を主な素材としたことは勿論、研究の前提となる理論を冒頭で大きく掲げた点である。すなわち、これまで文学や映画、演劇、漫画などのさまざまな表現メディアを越境するテクストの力学を分析する際に参照されてきた、リンダ・ハッチオンに由来する「アダプテーション」の理論である。それを踏まえて、小説、落語、歌舞伎、講談といった表現ジャンルを一つの物語が当たり前に横断する時代であった「明治初年代から二十年代にかけての時期」（二二三頁）を対象として研究しようというのが本書の目論むところである。

とりわけ「第3章 「見えがたきもの」を見えしむる——三遊亭円朝「怪談乳房榎」第4章 メロドラマの翻案——三遊亭円朝「錦の舞衣」第5章 小説を落語にする——三遊亭円遊「素人洋食」第6章 講談・落語・小説の境界——快樂亭ブラック「英国実話「孤児」」第7章 落語を「小説」化する——談洲楼燕枝「西海屋騒動」は、表現メディアの越境を中心に扱う点で、「アダプテーション」という術語から想像される研究の最たるものであろう。そこでは、十返舎一九の読本、ヴィクトリアン・サルドウの戯曲、山田美妙やチャールズ・ディケンズの小説からの落語への翻案、あるいはその反対の、落語の小説化といった問題を、講談などの周辺の表現ジャンルをも視野に入れて、それらの様相を確かめながら論じている。形は異なれども、昭和後期以降におけるメディアミックスの隆盛は、元を辿れば江戸から明治に時代が移る中で出現した、落語の〈近代〉にその標本が見出されるのだと考えさせられた。

そうした本書の見どころは文学研究としての画期性に直結している。というのも、従来、江戸文学研究者によるものが大半を占めてきた落語という表現ジャンルにまつわる研究を、「翻訳」という契機を結節点として近代文学研究に開いているからだ。その意味で注目されるのは、前著で論じられた山田美妙における言文一致や翻訳の問題を、さらに継承して発展させた「第8章 翻訳と言文一致との接点」である。本章で照らし出された明治十年代から二十年代にかけての言文一致の多様性は、完成形に向けての動きとして単線的に捉えられがちな言文一致の可能性の広がりを見せており興味深い。

また、前著からの関心の継続という点で見逃せないのは、美妙と同様に前著で繰り返し言及されている坪内逍遙の『小説神髓』に触れ、そのありようを多角的に捉えている「第3章」「第4章」「第6章」「第8章」である。それら以上に『小説神髓』を中心的に取り上げているのは「第1章 「人情」を語る怪談——三遊亭円朝「怪

談牡丹灯籠」第9章「源氏物語」と坪内逍遙の「人情」論」第10章 キヤラクターからの離脱——坪内逍遙「小説神髓」「小説の裨益」「主人公の設置」であり、落語という枠を超えて「人情」論がいかなる文脈のなかで論じられ、それがどのように実作との関係を取り結ぶのが具に論じられている。

具体的に言えば、「第1章」で「怪談 牡丹灯籠」をめぐっての人情のジャンル編成やそこで描かれる「人情」の内実、さらには逍遙の『小説神髓』における「人情」論への接続が論じられる。さらに「第9章」では、「源氏物語」の捉え方をめぐって、同時代の文学史家と逍遙との差異から説き起こされ、物語における「人情」を現実の反映とする逍遙の特異な発想が、先行する本居宣長『源氏物語玉の小櫛』における勧善懲悪の否定や、「人情」を現実世界と結びつける為永春水『春告鳥』の発想の延長線上にあると主張される。そして「第10章」では、「第1章」で扱われた「人情」論に関わって、逍遙が『小説神髓』で参照したと考えられる「倍因氏 心理新説」のアレクサンダー・ベインによる原著を主に取り上げ、「第9章」での議論の先に見えてくる人間の心理、すなわち「人情」をいかに小説で描くかという問題に対する逍遙の向き合い方を詳細に論じている。ちなみに『倍因氏 心理新説』については、「第2章 「幽霊」と「神経病」——三遊亭円朝「真景累ヶ淵」で、「幽霊」と「神経病」に関する同時代言説を確認する際にも取り上げられており、前者以来の言説研究の方法が本書でも随所に用いられていることを示している。」「第10章」に話を戻すが、その後半では、従来の研究で軽

視されてきた『小説神髓』後半部にみられる「理想派」と「現実派」とをめぐる議論を分析検討し、前者の議論を「日本で最初に小説で作中人物としてのキヤラクターをどのように構築するかについて議論したもの」（二七五頁）とする一方、逍遙は「人情」を後者において求め、そこに「明治の世にふさわしい小説の新しい姿」（二七六頁）を見出していたと主張する。そして、逍遙がその観点から評価していたのが、本書の前半で主に扱われた三遊亭円朝であったと結論づけている。

以上、紹介の密度に濃淡はあるが、すべての章にわたって手短まとめてみた。今回、本書に対して改めて感じたことは、綿密な構成による一冊の研究書としての完成度の高さである。「二冊目の博士論文」のつもり」（二九九頁）という著者の表現に偽りはない。

（二〇二三年二月二四日発行 四六判 三〇六頁 二八〇〇円＋税 青弓社）

（あしかわ・たかゆき 平成二十三年卒業生

早稲田大学高等学院・高等学院中学部非常勤講師）